

第三章

階 級

——新しい「ミドル・クラス」——

新井 潤美



「月桂樹荘」——郊外のロウワー・ミドル・クラスの家
(グロウスミス兄弟『ノーボディの日記』から)

第一節 後期ヴィクトリア朝における ロウワー・ミドル・クラス

ロウワー・ミドル・クラスに生まれた、聡明な少年にとつては、人生のこの局面をおよそ通らないわけにはいかなかった。

〔流謫の地に生まれて〕第一部第二章

ここである「この局面」とは、主人公ゴドウィン・ピークが、近親の女性を軽蔑の目で始めることを指している。母親、妹、そしておばに対して嫌悪の感情を抱くゴドウィンが恋に落ちる相手は、自分より上の階級、アッパー・ミドル・クラスに属するシドウェル・ウォリコムである。そこからゴドウィンの苦悩が始まり、彼はシドウェルとその家族に気に入られるために、宗教観さえ変えることになる。階級意識は信仰にまで影響を及ぼすのである。

ミドル・クラスという呼称に「アッパー」と「ロウワー」という形容詞をつけるようになったのはヴィクトリア朝半ばのことである。ひとくちに「ミドル・クラス」と呼ばれていても、アッパー・ミドル・クラスとロウワー・ミドル・クラスは、じつはまったく別の階級なのであり、「アッパー・ミドル・クラス」が「紳士」と「淑女」からなりたっているのに対して、「ロウワー・ミドル・クラス」をなすのは、「紳士」でも「淑女」

でもない「人」^{パレン}なのである。かなり大雑把な言い方をすれば、同じミドル・クラスでも、従来「アッパー・ミドル・クラス」に属するのは、知的職業、つまり聖職、研究職、法曹、軍隊の士官クラス、及び金持ちの商人からなる階級で、地主や貴族階級の、長男以外の子息たちだということもあって、アッパー・クラスとのつながりが強い。それに対してロウワー・ミドル・クラスとは、もともとはワーキング・クラスの出身でありながら、教育などの恩恵により、事務職や小規模の小売業などについて、ミドル・クラスの仲間入りを果たした人びとからなっている。こういったロウワー・ミドル・クラスのうち、富を築き、自分の子供たちには教育を受けさせ、ホワイト・カラーの仕事につかせて、さらに上昇させた人びとのことを、「ミドル・ミドル・クラス」と呼ぶようになった(図①)。

つまり、ロウワー・ミドル・クラスからアッパー・ミドル・クラスに移ることは、並大抵のことではない。それどころか、その世代のうちにはほとんど不可能に近い。たとえば、同じ法曹を目指すにしても、ロウワー・ミドル・クラスの子息にとつては、事務弁護士(solicitor)になるのは可能であっても、法廷弁護士(barrister)は夢にも叶わないものであった。

しかしそれでも、教育を受ける機会が広がったことによって、ワーキング・クラスやロウワー・ミドル・クラスの野心的な若者たちは、少しでも上の階級に近づく術をみいだしたのである。実際、十九世紀後半においては、このような、野心的で勤勉な

若者たちが、勉強によって夢を成就させようとする様子を描いたものが多い。H・G・ウェルズの『恋愛とミスター・ルイシヤム』（一九〇〇年）、『トーノ・バンゲイ』（一九〇九年）、アーノルド・ベネットの『北部出身の男』（一八九八年）、ギッシングの『流謫の地に生まれて』（一八九二年）などが代表的な例で



図①「上昇志向——農家の娘も家を出て家庭教師になりたがる昨今」
『パンチ』（1885年4月11日号）

ある。いずれも、著者自身の体験をもとにして書かれているのだが、共通していることは、こういった作品においては、主人公はいくら丁寧な計画表を作って、毎日根をつめて勉学に励んでも、最終的にはその努力が報われないという点にある。「典型的に自虐的な方法で、ギッシングはピークに、自分自身が得ることのできた成功を与えることを拒否したのである」¹⁾。同様に、ウェルズのミスター・ルイシヤムも、『トーノ・バンゲイ』のジョージ・ボンデレヴォも、ベネットのリチャード・ラーチも、最初に抱いた夢を手に入れることができない。特にベネットの『北部出身の男』の結末では、主人公と著者のコントラストは、はっきりと描かれている。

彼には自分がもうこれ以上執筆を試みるつもりがないことが分かっていた。……これから自分はたんなる、郊外の夫になるのだ。今までの倍以上も従属することになるだろう雇い主には義理をつくし、家の修理を怠らず、庭いじりをして、妻を散歩、そしてときには劇場に連れ出し、そしてなるべく貯金を多くする。……ひょっとしたら自分の子供が文才を示すようになるかもしれない。もしそうならば——そしてこういった才能は消えてしまうことはなく、次に受け継がれるのだろうか——その才能を必ず育て、そして伸ばしてやるのだ！ （第二十二章）

こうして、ラーチは、自分が果たせなかった夢を、次の世代

に託すという、妥協の人生を選ぶのである。キャリアと家庭の間で揺れるのは、この時代では女性の運命だけでなく、ラーチャ、ウエルズのミスター・ルイシヤムといった、ロウワー・ミドル・クラスの男性のジレンマでもあるのだ。彼らにはつまり、両方を手に入れるだけの財力がないわけで、結局は彼らの階級に特有の小心さと用心深さ、そして保守性が勝利を収め、彼らは自分たちの階級の枠を乗り越えることができない。ウエルズ、ベネット、そしてギッシングもまた、このような人物を、「自伝的」な小説の主人公に置くことによって、かえって、自分たちの成功を確認しているのである。

十九世紀半ばにアメリカではホレイシオ・アルジャーが、『ぼろ着のデイック』（一八六七年）などの作品で、いわば「ぼろから富へ」物語を流行させ、アメリカン・ドリームを語っている一方で、イギリスでは「いくら勤勉に働き、勉強に励もうと、階級の壁は乗り越えられない」という、なんともやるせない作品が人気を集めていた。しかし、これらの作品を読むのは、ロウワー・ミドル・クラスと自分たちの間に距離を置きたいと考える、アッパー・ミドル・クラスの読者だけではない。例えば、すでに一七一九年には、デフォォーの名高いロビンソン・クルーソーは、「真ん中、あるいは下層階級の上部」に属し、その地位に満足するようにと父に言われていたのに、従わなかったために、とんでもない目にあつたと繰り返し読者に警告を発しながらも、最終的には自分の息子を土地持ちのジェントルマ

ンにしてしまい、上昇志向の読者に結果的には希望を与えている。同様に、ウエルズやベネット等の作家も、「高望みしたロウワー・ミドル・クラス」の運命を、ユーモアをこめながらも赤裸々に描いてみせる一方で、その実、成功した自分という例外の存在によって、彼らにまたひそかに夢をもあたえているとも言えるのである。

教育が普及し、読み書き能力を持つ人口が増えることによって、この時代にはロウワー・ミドル・クラスという新しい読者層ができあがつた。そして彼らをターゲットとした、新しい私たちの新聞や文芸雑誌が次々と創刊されていく。そこでは、無害かつ物語性のある短篇小説が求められた。一八九一年七月から『ストランド・マガジン』に掲載された、コナン・ドイルの「シャーロック・ホームズ」のシリーズが、その一例である。ウエルズ、ベネット、そしてギッシングは、これらの読者の階級の出身者であり、かつ自分の階級の読者を対象とする雑誌に執筆していたのである。

第二節 「ロウワー・ミドル・クラス小説」への転向

ギッシングはヨークシャーのウエイクフィールドという町で、葉屋の家に生まれた。店の上が住居という、典型的ロウワー・ミドル・クラスとも言える環境に育ったのである。少年の

頃から、勉学をとおして成功を得たいというオブセッションを持ち、寝る時間も惜しんで「教養」を身につけようとした。一八七二年には奨学金を得て、マンチェスターのオーエンズ・カレッジに進学している。この学校は『流謫の地に生まれて』で、主人公ゴドウィン・ピークが、奨学金を得て入学した、キングスミルのホワイトロー・カレッジにあたる。ピークは、ホワイトロー・カレッジで常に、まわりの生徒たちに対する劣等感に悩まされる。これは、勉学の上での劣等感ではなく、所属する階級から来る劣等感である。このことについては次の節でより詳しく述べるが、教育をとおして、上の階級の人間と接することになる、ロウワー・ミドル・クラス及びワーキング・クラス、優等生たちが常に抱える悩みであり、このテーマそれ自身は、現代においても、けつしてアナクロニズムとはならないのが、イギリスの社会の特徴であろう。二十世紀においては、例えば詩人フィリップ・ラーキンの書いた長篇小説『ジル』（一九四六年）は、まさにこのテーマの上になりたつ、滑稽ながらもものがなしい作品となっている。また、一九七二年に桂冠詩人となったジョン・ベッチマンも、ロウワー・ミドル・クラス出身であり、大学で出会うアッパー・ミドル・クラスの友人たちに対して抱くコンプレックスを常にあらわにしていた。

オーエンズ・カレッジでギッシングが起こした不祥事も、結局は、このように、自分がまわりから孤立し、しかも劣等感を抱かされたことから生じたという見方ができる。もし『流謫の

地に生まれて』をそのまま伝的に読むことができるのであれば、ピークが、同級生の母親や姉妹といった、アッパー・ミドル・クラスの女性の言葉や立ち居振る舞いに、大きな驚きと気後れを感じるように、ギッシングもこの階級の女性には怖じ気づいたことが想像できる。しかし一方では、自分と同じ階級の女性蔑視しているのであれば、かえってロウワー・ミドル・クラスのな道德観やリスベクタビリティから解放された存在である、ワーキング・クラスの女性に惹かれるのも理解できるということになる。

実際に、原因はどうであれ、売春婦メアリアン・ヘレン・ハリソンのためにギッシングは盗みを働き、一ヶ月刑務所で重労働の刑に処せられた。このときに彼はすでにロンドン大学への入学が許可されていたが、それも諦めざるをえなかった。その後ギッシングは、数人の知人から経済的援助を受けて、アメリカへと渡る。その後イギリスに戻り、一八七七年にはロンドンに居をかまえた。ここで彼は、ワーキング・クラスの生活感をまのあたりにし、自ら体験することになる。その中で書かれるのが『暁の労働者たち』（一八八〇年）、『無階級の人々』（一八八四年）、『民衆』（一八八六年）、『ネザー・ワールド』（一八八九年）といった、ワーキング・クラスを扱った小説である。ジェイコブ・コールグは、その伝記の中で、このときのギッシングの様子をこう語っている。

ライクロフト同様、ギッシングは、自分が赤貧よりは数シリング分上にいる自分を、幸運と考えていた。彼は自らの貧困を人格に対する試練と考えていたようで、その意味では、自分のみじめな生活を楽しんでいるといってもよいほどだった。

(Kong 21)

こうして実体験したワーキング・クラスの生活が、ギッシングの初期の小説の舞台であり、題材であった。チャールズ・キングズリーの『オールトン・ロック』（一八四九年）や、ウォルター・ベザントの『あらゆる種類と身分の人たち』（一八八二年）といった、いわゆる種類と身分の人たち（一八八二年）といった、いわゆるワーキング・クラス小説の流れで書かれたものの、ギッシングの初期小説は、あまりに深刻で陰鬱で娯楽性に欠けると批判された。しかし、ギッシングが、自分の階級よりも下に位置する人びとについて書くことを通じて文筆の自信をつけてきたことも事実である。とりわけ、当時の主な読者層が知る術もない階級の実態を自分は知っているのだという自負があった。ただし、この初期の小説の中ですでに、ギッシングのワーキング・クラスに対する視線は、徐々に厳しいものとなっており、『民衆』においては、労働者階級出身の人物が、アッパー・ミドル・クラスの妻に比べて倫理観が欠如しているさままで書いている。そしてこれが、後に『流謫の地に生まれて』で、ゴドウィン・ピークに「僕は下層の、教育を受けない奴らが大好きだ！ 一番汚い害虫よりもおぞましい！」

（第一部第二章）と叫ばせる感情につながるのである。

一方で、このように文筆家としての自信と地位を確立してはじめて、ギッシングは自らの生い立ちである新興ロウワー・ミドル・クラスについての小説を書き始める。H・G・ウェルズは対照的に、『運命の車輪』（一八九六年）や『キップス』（一九〇五年）といった初期の小説の中で、すでに自分の属するロウワー・ミドル・クラスを軽妙かつ滑稽に描いて見せている。とはいえ、ウェルズは、『恋愛とミスター・ルイシャム』や『トノー・バンゲイ』のような後の小説において、自分の階級の限界をシニカルに描いてもいる。この階級が居住する郊外^{サブurbia}は、『宇宙戦争』（一八九八年）で火星人の襲来により徹底的に破壊されるのである。これに対して、ワーキング・クラスの考察の延長上にロウワー・ミドル・クラスへの関心が浮かび上がってくるからこそ、ギッシングに特有な点だといえよう。

第三節 郊外という舞台

ワーキング・クラスを舞台とするギッシングの初期の小説に対する当時の批評を読むと、その多くが、ワーキング・クラスの生活を正確に描写する能力をギッシングに認めている。一方で、アッパー・ミドル・クラスの登場人物については、その描き方に現実性がないとの非難が少なくない。実際、ギッシング自身の不満もこの点にあった。彼は弟アルジェノンにあてた、

一八八〇年十月十三日付けの手紙で次のように書いている。

すべての批評家は私をワーキング・クラスの一員だと思っているようです。もし私の作品を注意深く読んでくれば、このような推測はひどく馬鹿げているとわかりそうなものだ。私が研究しなければならなかったのは私とは違う世界、つまりミドル・クラスではなく、むしろロウワー・クラスのほうなのに。

(Letters 1: 303)

たしかに、例えば一八八〇年六月十二日の『アセニーム』に掲載された、『暁の労働者たち』に関する匿名の評者は、「著者は……クイーンズ・イングリッシュを完全にものにしていて、とは言えないが、その文体はかなりきちんとしていて、流暢なものだ」(Critical Heritage 51)と、著者が教養のない、ロウワー・クラス出身者だときめつけたようなコメントを書いている。また、同じ作品について、一八八〇年七月三十一日の『アカデミー』に掲載された書評で、筆者のジョージ・セインズベリーは、「ギッシング氏はその登場人物を、少なくともアップパー・クラスの人物を、いささかも現実的に描くことに成功していない」(56)と述べているし、一八九五年十二月二日の『デイリー・クロニクル』紙に掲載された、『無階級の人々』の匿名の書評は、「著者は……ロンドンの貧民とロンドンのロウワー・ミドル・クラスの社会を誰よりも鮮やかに描いている」

(2)と賞賛するのである。ここで評者の言う「ロウワー・ミドル・クラス」とは、のちにギッシングが「墮落したワーキング・クラス、向上心と能力のあるワーキング・クラス、墮落したロウワー・ミドル・クラス、向上心と能力のあるロウワー・ミドル・クラス」と羅列する、「社会の各層」(245)のうち、「向上心と能力のあるワーキング・クラス」と「墮落したロウワー・ミドル・クラス」の部分を指している。

たしかにこの時代には、いわゆる「ワーキング・クラス作家」と言われる文筆家が登場し、「内から書いたワーキング・クラスの生活」を読者に示して、話題になっていた。しかし、同時にこの時代に大きな関心を集めたのが「向上心と能力のあるロウワー・ミドル・クラス」、つまり、なんとか小金をため、郊外の小さな家に住み、新聞や雑誌、ウェルズやドイルの小説を読みふける、新しいロウワー・ミドル・クラス、つまり郊外の人々であった。交通機関の発達と政府の指導による交通運賃の値下げによって、それまでは自分の馬車を持つほどの経済力がなければ不可能だった、郊外という住居が、つねにアップパー・ミドル・クラスを模倣してきたロウワー・ミドル・クラスの手が届くものになったのである。ロウワー・ミドル・クラスという新しい市場を得て、郊外は急速に発達していった。彼らは家に少なくとも一人は使用人を置き、応接間には必ずピアノが据えられ、猫の額ほどの小さな庭に、小人の置物などを飾り、アップパー・クラスのカントリー・ライフの猿まねの生活を

作り上げた。

こうした郊外のロウワー・ミドル・クラスの人々は、この時代の読み物の題材として、好んでとりあげられた。例ば一八九七年に出版された『リスベクタビリティという名の病』では、著者のジェフリー・モートイマーは、「リスベクタブル」なロウワー・ミドル・クラスを評して「ブリクストンかクラパム（いずれもロンドンの郊外の居住地の名）に住み、隣人たちに對して『上品な』姿を見せようと、常に必死である」と揶揄している。

実際、一八九五年一月九日号の『スケッチ』誌に、ギッシングの『女王即位五十年祭の年に』の評を掲載したL・F・オーステインは「個人的には私はブリクストンで何が起こつても不思議ではないと思つてゐる。それでも私はギッシング氏が暴露したことにまことに驚かされた」(Critical Heritage 230)と書いた。あるいは、一八九五年一月十二日の『アセニアム』の匿名の書評では、「郊外はジョージ・ギッシング氏に大きな借りがある。彼はその最新作において、郊外を、優越感にあふれた近代のジャーナリズムの安っぽい嘲笑から堂々と救ふことができたからである」(Critical Heritage 233)と、賞賛している。いずれも、この新しい郊外のロウワー・ミドル・クラスの実態が、いまひとつつかみにくかつたことを示唆すると共に、題材や文体からも、明らかに「アッパー・クラス」の作家とは思えないギッシングが、ワーキング・クラスのみならず、ロウワ

ー・ミドル・クラスに對しても、権威であるとみなされているのである。

ギッシングはたしかに、経験から書くという点では、自分の出身階級であるロウワー・ミドル・クラスを描写することがもつとも得意であつたという感は免れない。彼が一時的に体験したワーキング・クラスの描写が、いかに実態に即したものであつても、読み物としては、陰鬱すぎて適さないと非難され、一方では、アッパー・ミドル・クラス以上の社会の描写は「不自然」と退けられたからには、彼は、本来の階級であるロウワー・ミドル・クラスに関する著述で本領を発揮せずにはいられた。たとえ彼が、ロンドン郊外のロウワー・ミドル・クラス社会について、直接的な体験を得ていなかったとしても、彼が「ロウワー・ミドル・クラス」の作家であることが知れ渡ると共に、その社会について彼が何を書こうとも、それがそのまま実態なのであると見られるようになったことが窺える。例えば一八九八年に発表した『都会のセールスマン』という作品がある。これは、「セールスマン」(commercial traveller)、下宿屋のおかみ、下宿人たち、陶器屋の女店主などの、当時のロウワー・ミドル・クラスの典型といった人物が登場する。陶器屋の女店主の夫がじつは貴族であり、自分の身分がいやで、身分を隠してクロウヴァーという名を騙つて結婚するが、爵位を継がなければならなくなつて「失踪」するのを、セールスマンのギヤモン氏がつきとめるといふ、かなり奇抜な物語である。ま

た、下宿人の一人であるポリー・スパークスは、劇場のプログラマー売りをしている。彼女に思いを寄せる事務員のクリストファー・パリッシュは、金がないためにポリーに求婚することができない。しかしある日彼は、ロウワー・ミドル・クラスの間でかなり流行った、あるゲームに参加する。これは当時、実際に週刊誌が行なったもので、一つの文の中に空白をおき、文の意味が通るように空白を埋めるといふ、現在の日本の、英語の試験問題のようなゲームだった。ある程度の教育を受けたロウワー・ミドル・クラスの読者を夢中にさせたといふこのゲームで、クリストファーはみごとに賞金を得て、まさにロウワー・ミドル・クラスのデウス・エクス・マキナによって、めでたく結婚することができるのである。この作品は、ギッシングにしては暗いところがなく（とはいえ、身分を隠していた男爵が病気になる、最後には、群衆にもまれて死ぬというくだりはなかなかパースに満ちているが）、軽快で楽しい作品であると、好評だったようだ。この作品についてのある書評は「登場人物の生活、言葉づかい、習慣は本物だ」(Critical Heritage 338-39)。「この話にでてくる、ロンドンの生活の一つの側面はけっしてまがいものではない。……著者はロウワー・ミドル・クラスの生活の悲喜こもごもをわれわれに教えてくれた作家であるといふことをあらためて思い起こさせる」(36)とも賞賛された。ギッシングは、自分の階級を描いてこそ、このように生き生きとするという評である。こういうところにイギリスにおける階級意識が

はつきりと表われている。

そしてここで注目すべきなのは、ウェルズやベネットなどのロウワー・ミドル・クラスの作家にとって、彼らのヒーローの成功というのは、勤勉で上昇志向の強いロウワー・ミドル・クラスの少年が、最終的には華やかなキャリアを諦め、適切な女性と結婚し、郊外に「幸せな家庭」を構えることにいるということだ。つまり、アルジャーの描く少年達のように、たとえ勤勉で道徳的な生活をして励んでみても、イギリスのヒーローたちは所詮は、自分が属する階級の中でのものともよい状態に行き着くに過ぎない。それどころか、ウェルズのキップスのように、思いがけずに莫大な遺産を手にして、アッパー・ミドル・クラスの仲間入りをしようとしても（キップスの場合は、勤勉だったわけではなく、たんに幸運だったのであるが）、自分が居心地の悪い思いをして、苦勞するだけなのである。

同様にギッシングにおいても、例えば『流謫の地に生まれて』のゴドウィン・ピークは、奨学金をもらって入学することのできたホワイトロー・カレッジで、アッパー・ミドル・クラスの子弟たちと肩を並べて勉強することになり、ここで、学問による向上だけでなく、アッパー・ミドル・クラスの友人を作ることによって、自分の出身階級をも越える機会を与えられるわけだが、ゴドウィンにはそれができない。かろうじて親しくなった同級生のウォリコム之母親にもろくに挨拶ができず、「あんなに感じのよくない若者ははじめてだわ! どういう育ち方を

したのかしら」(第一部第一章)と顰蹙を買う。しかも、ゴドウィンが学問においてさえ、完全に成功したとはいえない。学年末の表彰式では、ライバルのブルーノ・チルヴァーズにほとんどの科目で第一位の座を奪われてしまう。これは、ギッシング自身が、オーエンズ・カレッジで、首席だったことを考えると、著者があえて、自分の主人公に、社交と学問において二重の挫折を与えていることになる。

しかもピークは、ホワイトロー・カレッジでの教育を終えることさえできない。その理由が、またあまりにも「ロウワー・ミドル・クラス的」なのである。ゴドウィンの父親は労働者の息子であり、医者の子を養っていた母親よりは、階級が少し下であった。父親は四十三歳で死んだが、父の弟はパン屋の職人として生計をたてていた。同級生とともに表彰式から帰る途中にゴドウィンはいきなりそのおじに出会う。そしてそのおじが、この町で食堂を開く計画があることを聞いて、ゴドウィンは大きな衝撃を受ける。

自分が、学校の正面の食堂の経営者の甥だということがすべての同級生、すべての教授、いや、それどころか、門番たちにもわかってしまったら、どうやってここで勉学を続けてよいのだろうか? このような試練に対する予防薬は、倫理学にもみいだせない。どんな劣等生であれば、このような嘲笑と侮蔑の材料を、無視することができるだろうか?

(第一部第三章)

現代の感覚からは、あまりにも大げさに思えるゴドウィンの反応であるが、この話を聞いたゴドウィンの母親も、ゴドウィンは退学するしかないことに同意する。ゴドウィンのこの無神経なおじは、次のように描写されている。

きわめて耳障りな、純コックニーのアクセントでゴドウィンにこのように話しかけたのは四十五歳の男で、ズボンの折り目はくつきりとめだち、袖がいささか長すぎる、新しい、ぶらさがりのツイードのスーツを着ていた。その顔は見た者に下品な印象を強く与えるものだったが、同時に一種のあどけなさ、自己陶酔的なエネルギーと単純さが見られ、完全に不愉快なものになるのを妨げていた。額は狭く、目は小さくて輝いており、品の無い唇は、赤茶っぽい無精ひげに半分隠されていた。この顔立ちには、ゴドウィン・ピークに似たものがあり、たとえその場の状況ではありそうもないにしても、彼らが親類関係にあることを気づかせるのに十分であった。名前を呼ばれてゴドウィンは凍りついたように立ちすくんだ。両腕を下に伸ばし、まるで殴られるのを避けるかのように、頭を後ろにひいた。彼の顔色は一瞬土色になり、次の瞬間は頬にさっと赤い色が走った。

(第一部第一章)

ゴドウィンのおじ、アンドリュー・ピークの話す言葉は、彼

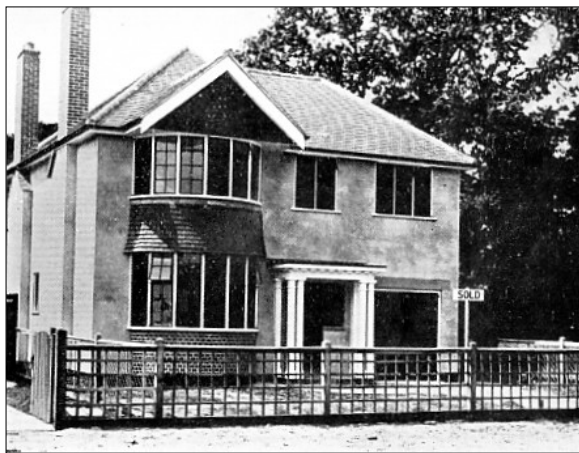
の「純コックニーのアクセント」がはっきりと読者に伝わるように表示されている。表彰式 (prize day) は prize-dye となるし、「何をもらったんだい? (What 'ave you took?)」という質問においても、h 音の欠如、文法の間違いなど、ロウワー・ミドル・クラスにとっては、彼らの階級をワーキング・クラスに引き戻す、致命的な要素がはっきりとでている。

ギッシングは後に『下宿人』(二八九五年)というユーモラスな中篇小説を書いているが、その主人公のママフォード夫妻は、経済的な理由で下宿人をおかずに居られない状況におかれている。彼らはロンドンの典型的郊外サットンに住むロウワー・ミドル・クラスの人物として、読者の前に現われる(図②)。

「ラニミード」⁽⁵⁾ (これがママフォード夫妻の家の名前なのだが) は、サットンの住民達に、自分がカントリーサイドに住んでいると思込ませてくれる、並木道の一つにたつ一軒家だつた。赤いレンガ造りで、正面玄関の両側に窓があり、木造とスタッコのボーチがついていた。玄関の脇の片方には張出し窓が、もう片方には普通の窓がついており、そのコントラストによって、郊外の人びとの目を楽しませていた。

(第二章)

『下宿人』の原題 (The Paying Guest) とは、「金を支払う客」という意味であり、ここに敢えて下宿人を下宿人 (boarder) と



図② 郊外の家——郊外の典型的な家が「美しい庭園の中」にあると宣伝されている、不動産の広告。フランク・グリーン『ロンドンと新旧の郊外』(1933年)から。

呼ばないママフォード夫妻のプライドが揶揄の対象となっている。そしてこの「客」に関して彼らがまず第一に心配するのは、その発音である。

階段の下の方からはっきりとした、気取りの無い声が聞こえてきた。「ママフォード夫人は御在宅 (at home) ですか?」あ

あ、よかった。たしかに h の音がきちんと発音されていた！
(第一章)

服装、趣味、人柄によって、相手の階級を判断する力がないマムフォード夫妻は、この新しい「客」が「下品でない」ことを判断する材料は、発音しかないのである。こうしてミス・デリックは、h の音を発音することによって、マムフォード夫妻の「客」として無事に迎えられる。その後、彼女の母親が、嘆かわしくも、h の音を発音できず、しかも文法の間違いを連発する階級であることが判明する。しかしマムフォード氏も、じつは経済的にあまり豊かではないため、少々譲歩をしても、下宿人をおく必要にせまられている(図③)。

「ミス・デリックを迎え入れることにしよう」とマムフォードは宣言した。「彼女の両親がここへ来るわけではないのだから。ミス・デリックはたしかに h を発音しているのだろうか?」

「ええ、もちろん。多分よい学校に行っていたのでしょう」

(第一章)

ここで重要なのは、たとえミス・デリックの母親が h を落としていようと、その血の繋がった娘でも、h を発音するので



図③「アツビーな思ひつき」『パンチ』
(1885年6月6日号)

h の音の需要性——ロウワー・ミドル・クラスのプロウキー夫人は、展覧会で、恥ずかしい裸体の絵を見ないですむように、隣の厩舎から遮眼帯を借りてきた。「芸術」に接したいが、過剰に道徳的な反応をする、ロウワー・ミドル・クラスの夫人の話し方の特徴は、h の音の間違った使い方である。

あれば、自分たちと同じく、かろうじてミドル・クラスの一員として、マムフォード夫妻が迎えることである。ここにイギリスの階級の流動性が見られる。マムフォード夫妻も、ひよっとしたら、h を落とす両親を持っているのかもしれない。しかし、自分たちが、「よい学校」に行つて、なんとかミドル・クラスの仲間入りをした手前、同じようなミドル・クラスの新参者は、受け入れる用意があるのである。

さらに留意すべき点は、ミス・デリックの母親が h の音を落とす様子、あるいは『流謫の地に生まれて』のアンドリュース・ピークの「エイ」を「アイ」と発音するコックニーのアクセントは、書き言葉で表わすことができるのであるが、マムフォード夫妻や、ゴドウィン・ピークのロウワー・ミドル・アクセントは、微妙な母音のアクセントで違いがわかるので、書き

言葉で表わすことができないことである。ゴドウィンは、おじの明らかなコックニー・アクセントを、級友の手前恥じながらも、自分自身、いわゆる「クイーンズ・イングリッシュ」を話すわけではない。成人したゴドウィンは、ウオリコム家の人々に再会し、その家の娘シドウエルに恋をする。彼女を手に入れるためにゴドウィンは、それまでの自分の信条に背いて、牧師になる勉強を始める。あくまでも、ゴドウィンの両親に気に入られ、少年時代の悪い印象を払拭し、アッパー・ミドル・クラスである彼らの階級の一員だと思い込ませるためである。しかし彼にはいまだ気がかりな点がある。

自分には、以前属していた、下の階級を思わせるなにかが残っているだろうか？ 発音になにか不備はないか、話し言葉に、お里が知れるようなきこえなさはないか？ 自分の言葉について間違いなく判断するのは不可能だが、自分の限りでは、下品な癖はないようだった。ホワイトロー校を退学してからかなり時が経っているが、彼が手本としていた何人かの教授のアクセントはまだ真似することができた。……バックランド・ウオリコム（ウオリコム家の長男、ゴドウィンの友人）は、自分の話し方にいささか無頓着なようだったが、これは、発音について考える必要の無い男、子供部屋にいるときから上品な発音をすることが当たり前である人間独特の無頓着さだった。これからは、自分もこの効果を狙わなければいけない。

言葉が正確すぎはいけない。若者が正確に話しすぎると、意識して努力しているように見えるからだ。ときには少ししい加減な構文を使い、文法的な語句の代わりに、口語的な言い回しをしなければいけない。
(第二部第三章)

ここでゴドウィンが気にかけているのは、過剰矯正 (over-correction) と呼ばれる、ロウワー・ミドル・クラスが陥りがちな癖である。現代でも、一部のアメリカ人の言葉にこの傾向が見られるが、文法の誤りを、ワーキング・クラスと恐れるあまり、あまりにもベタンティックな言葉遣いをしてしまうことである。数年前、イギリスのエリザベス女王が、文法的に *be* と言うべきところを *are* と言ってしまった話題になったが、このような誤りはアッパー・クラスの特権ともいえる。そしてアッパー・ミドル・クラスをめざすゴドウィンは、こういった細かい事情まで把握していて、とにかく自分の出身階級に付随する要素を完全に捨てようとするのである。

したがって、『下宿人』のママフォード夫妻のスノバリーなどは、まだまだ可愛い方であり、ロウワー・ミドル・クラスの間人がアッパー・ミドル・クラスに入ろうとするためには、たんに真面目に勉強に励むだけではとても無理だというのが、ギッシングが描く、ゴドウィンの涙ぐましい努力によって、はつきりするのである。

ゴドウィンはそもそも、自分が生まれてきた階級に、精神的

には属していないと信じていた。彼が自分の階級を捨てて、アッパー・ミドル・クラスの仲間入りをしようとする不遜な行為も、彼の中では、己が精神的には上の階級に属するという信念によって正当化されていたのである。

彼は血のつながりという事柄に対して心を閉ざし、最

近、自分の失意の原因として自分に言い聞かせるようになった言葉を繰り返した。「僕は流謫の地に生まれた——流謫の地に生まれたのだ」。そしてとうとう彼は探求の旅にでることになったのだ。自分の精神的な同胞に出会える、見知らぬ土地を探して。

(第一部第五章)

しかし最終的にゴドウィン^{ユグザイル}は夢に破れ、オーストリアのウィーンで一人寂しく、文字通りの流人^{ユグザイル}となって世を去る。この知らせを聞いて、ゴドウィンの友人エリカが「死ぬ時も流人か、可哀相に」と思うところで小説は終わるが、こうしてギッシン^{ユグザイル}グは、読者の誤解の余地がないように、小説のテーマを、しつこいまでに確認している。同じミドル・クラスの中で、一生か



図④「郊外の住人の悲哀の歌」『パンチ』(1885年8月22日号)

仕事が終わって郊外の家に帰ろうとするロウワー・ミドル・クラスの男性。雨の中、夕食の材料を持って、乗合馬車を待っているが、流しの辻馬車が邪魔で、乗合馬車を留め損ねてしまう。辻馬車に乗る階級の人々を妬む気持ちはないが、せめて辻馬車が道を空けてくれるように、警官が注意をしてくれればよいのに、と悲哀を込めて歌っている。

けてもロウワーとアッパーの溝を越えることができなかった主人公のペーソスが強調されるのである。

一八九三年にギッシン^{ユグザイル}グはそれまで二年間住んでいたエクセターから、ロンドン郊外のブリクストンに移ってきた。そこで彼はサバーバン・ロウワー・ミドル・クラスの生活の場を目の当たりにすることになる(図④)。

ロンドン南部ではロウワー・ミドル・クラスはもはや、労働者とプロフェッショナルに挟まれた、不安定な、従属的な位置を占めていなかった。この階級は自信を持った一つの文明をなし、その赤レンガの家は、地平線まで広がり、サリーやケントのカントリーサイドにまで容赦なく侵入していったのである。

『女王即位五十年祭の年に』では、ギッシングはもはやロウワー・ミドル・クラスを共感の目で見てはいない。このサブバン・ロウワー・ミドル・クラスが、自分が属していたウエイクフィールドの商人仲間のロウワー・ミドル・クラス社会とは異なっていたこともあるのだが、H・G・ウェルズと同じく、恐ろしい勢いでカントリーサイドに広がっていく郊外^{サバービ}、サブバン・スプロールと呼ばれるこの現象に、恐れをなしていたのである。

この作品にでてくるフレンチ三姉妹の描写は、郊外のロウワー・ミドル・クラスの女性の痛烈なカリカチュアとなつてゐる。

彼らは不思議な言語を話した。それはいい加減な教育と、偽の洗練が、根強い俗悪さという幹に接木された結果のものだった。もし、無知とか、育ちが悪いといった謗りを受けたならば、彼らは三人とも驚き怒ったことだろう。エイダは十七歳の終わりまで「若い淑女のための学校」に通っていたし、残りの二人は十八になるまで、さらに気取った学校で、教養を学んだのであった。全員「ピアノを弾く」ことができた。全員が「フランス語を知っている」と言い張り、そう信じていた。ピアトリスは経済学を「やった」のであり、ファニーは無機化学と植物学を「ひととおり終えた」のだった。言うまでもなく、実は彼ら

の精神、人格、そして性質は、彼らに押し付けられた教育の影響を徹底して受けなかったのである。彼らが、自分たちの使用人よりも洗練されたアクセントで話すことができるのはたんに、彼らがまがい物の中で育てられ、金の力によって、彼らの精神的な同胞である、使用人たちと一緒に暮らすことを免れているにすぎないことを意味しているだけであつた。

(第一部第二章)

この俗悪な郊外から抜け出すために、登場人物の一人、ジェシカ・モーガンは、猛勉強をして学位を得ようとする。この小説において、唯一好意的に描かれている人物であるナンシー・ロードは、アッパー・ミドル・クラスの青年ライオネル・タラント（といつても、その祖父はロウワー・ミドル・クラスに所属していたことが判明するのだが）との結婚によって、自らの階級を逃れる機会を与えられ、その弟ホレスは、勉強ができないために、裕福な後援者（実は自分の母親なのだが）の出現によって、金の力で脱しようとする。しかしいづれの人物も最終的にはその試みを成功させることができないのである。

このように、ギッシングの作品において、その登場人物は、おのれの階級につきまとう様々な要素から逃れることができない。上にも述べたように、『民衆』では、ワーキング・クラスのリチャード・ミューティマーが、思いがけなく遺産を相続し、アッパー・ミドル・クラスの女性アデラと結婚する。しかも彼

は、じつは自分と同じ階級に属する、エマという許婚がいたにもかかわらず、彼女を捨てて上の階級の女性と結婚するのである。アデラ自身は、すでに心を寄せている男性がいたのだが、その男性に関する醜聞を信じてしまったために傷心し、ミューティマーの財産にひかれた母親が薦めるまま、ミューティマーと結婚してしまう。言うまでもなく二人の結婚生活はうまくいかない。ギッシングは彼らのすれ違いを描く際に、執拗に思えるほど彼らの階級の違いを強調するのである。後に、新たな遺書がみつかり、自分に遺産を相続する権利がないことが発覚した際もミューティマーは、その遺言書握りつぶそうとするのに対して、妻のアデラがそれを許さない。「これほど長くアデラと一緒に住んでいた結果、より高潔なものの考え方を少しは理解せずにはいられなかった」(第二十四章)ミューティマーは、とうとう妻に屈するが、自分と同じ階級の人間と結婚した妹のアリスはそうはいかない。彼女はアデラが余計なことをしたとくつてかかり、ただでさえ「気取っている」と敬遠していたこの義姉を憎み始める。このように、登場人物の道德観が、それぞれの所属する階級の影響による短絡的なものとして描かれているのである。

第四節 ヘンリー・ライクロフトの階級

この時代において、階級へのオブセッションがギッシングに

限ったものでないの言うまでもない。例えば、彼の友人でもあったH・G・ウェルズは、ロウワー・ミドル・クラス向けの読み物で成功を収め、ロウワー・ミドル・クラスの主人公を扱った、半自伝的な作品を書いているが、その過程で、この階級に対して、近親憎悪とも言える感情を抱くようになる。彼は『宇宙戦争』のような作品において、ロンドンの郊外地を破壊し、さらに、その評論では、優生学的思想を表明するようになる。

一方、『ヘンリー・ライクロフトの私記』(一九〇三年)におけるギッシングは、階級を越えたある境地を表わそうとしているようだ。この作品は、ヘンリー・ライクロフトという作家の手記を、著者が編集したというかたちをとっているが、その『編集者』による序文によると、ライクロフトは五十歳で思いがけぬ遺産を受け取る。彼はさつそくそれまで住んでいたロンドン郊外の住居を引き払い、カントリーサイドに移り、物書きという仕事をやめ、理想的な家政婦において、こじんまりした家に住まう。散歩をして、本を読み、黙想にふけり、考えたことを断片的に書き留める。その中にはイギリスにおける階級に関する考察も含まれているが、これらはあくまでも他人事として書かれていて、筆者がどの階級に属するかは定かではない。しかしこれらの断片に記されているラテン語やドイツ語の引用から、筆者が教養ある紳士であることが垣間見られる。実際、この手記は、ようやく、アッパー・ミドル・クラスの文人とい

う生活を手に入れた人物の手記という設定になっている。同じカントリーサイドに暮らしても、自分の土地に責任を持ち、ノブレス・オブリージュを負う、地主階級に属するわけではなく、気ままに、孤独を楽しむことができる人物である。

このような理想的な「ジェントルマン」の姿を書いたギッシングは、ライクロフトと自分を重ねられることに怒りを表明した。ライクロフトとギッシングをまったく同一人物と読んだ『アセニーム』の評者が、「この手記は、その本質は隠遁者であり、研究者である人間が書いたもので、写実的な小説の書き手よりはむしろ大学教授だったほうがよかったような人物である」と書いたときに、ギッシングはそれを、小説を書いている自分へのあてつけととって、激怒した。

たしかに、豊かな教養と感受性に溢れるライクロフトの手記は、ギッシングのそれまでの作品、そして彼自身の出身階級や背景を考えると、ロウワー・ミドル・クラスの勤勉な若者が陥り易い、知識のひけらかしのような不自然さという印象を免れない。ハーディが、その小説に、ラテン語系の難しい言葉を好んで使って、自身の学問に対するコンプレックスを解消しようと試みたように、ライクロフトも、ギッシングが理想とする、存在しえない有閑紳士の肖像のように見られかねない。

十九世紀後半、社会によって教育を受ける機会を得て、「上昇する」機会を与えられた人々が、結局は自分の出身階級からはみだし、同時に、上の階級にも落ち着くことができないと

いう不条理さを、この時代の「ロウワー・ミドル・クラス」の作家たちは、繰り返しとりあげざるをえなかった。ウェルズが、近親憎悪と優生学へと惹かれていた一方で、ギッシングは、『ヘンリー・ライクロフトの私記』において、それこそ「無階級」の理想的な第二の自我 (alter ego) を書くこうと試みたのかもしれない。

註

- (1) Pierre Coustillas, introduction, *Born in Exile*, by George Gissing (Brighton, UK: Harvester, 1978) xii.
- (2) ベッチマンの家は経済的には裕福だったが、彼は父親が商人であることに、つねにコンプレックスを感じていた。
- (3) Geoffrey Mortimer, *The Blight of Respectability: An Anatomy of the Disease and a Theory of Curative Treatment* (London: University P, 1897) 5.
- (4) 同じ年にギッシングが『チャールズ・ディケンズ論』を出していることもあって、ディケンズの影響を受けた作品であるという評が当時は多かった。
- (5) ロンドンの南西、テムズ川岸の草原で、ジョン王が一二一五年にマグナ・カルタに調印したという場所の名。ロンドンの郊外では、このように歴史にちなんだ有名な土地か、あるいは「森」「丘」といった、カントリーサイドを思わせる名前を家につけることはやっていた。
- (6) Paul Delany, introduction, *In the Year of Jubilee*, by George Gissing

(London: Dent, 1994) xvii.

(7) 『アセニーム』一九〇三年二月二十一日号の匿名の書評。ギッシングはこの書評が、『ヘンリー・ライクロフトの私記』を褒めるというかたちをとりながら、それまでに自分が書いた小説の価値をすべて否定するものとして憤慨したという (*Critical Heritage* 416)。